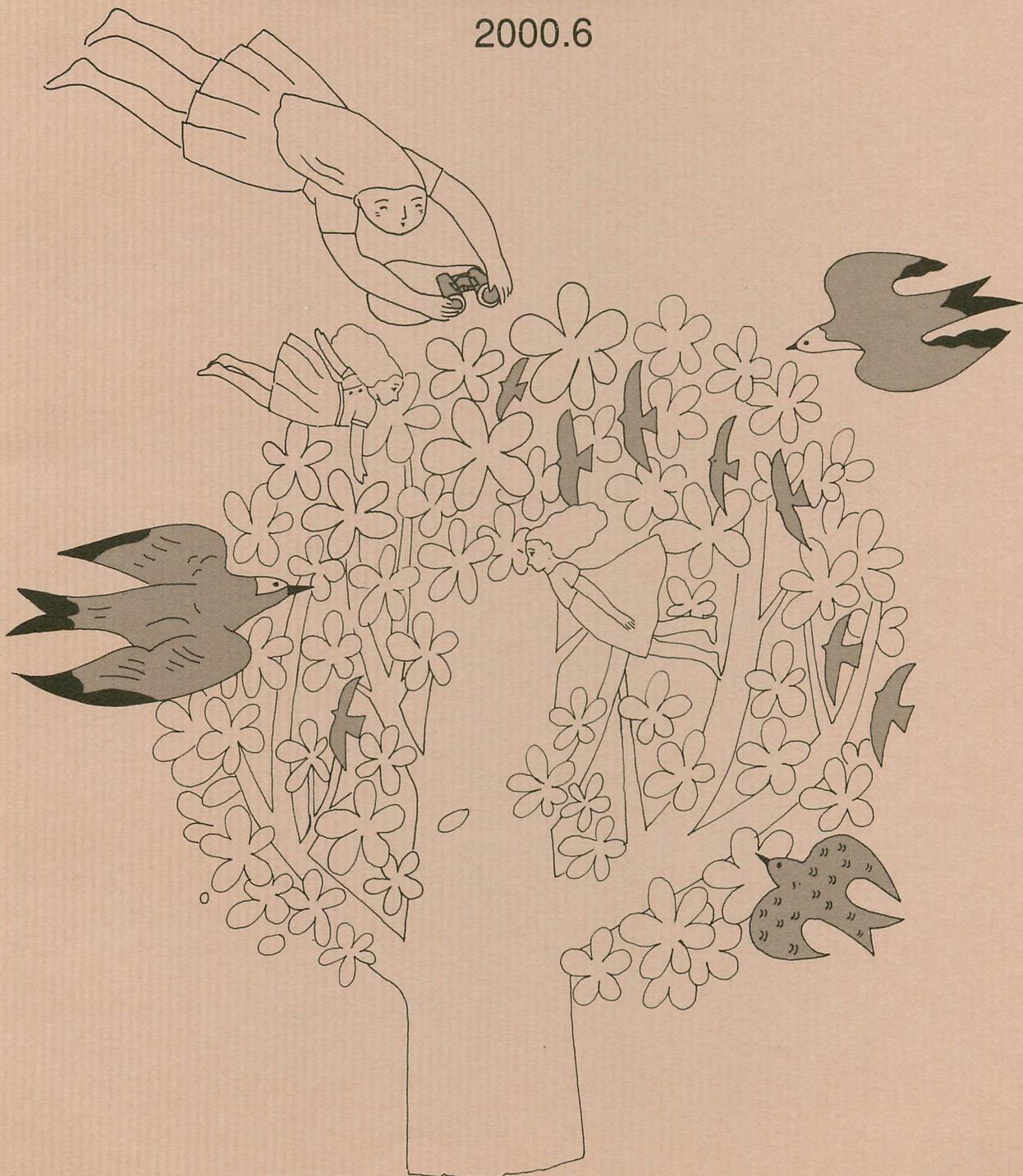


59号

愛鳥教育

2000.6



全国愛鳥教育研究会

愛鳥教育 No.59 2000.6

目 次

故江袋島吉会長追悼		
江袋島吉会長の死を悼む ----- 渥美守久	3	
いつもの笑顔で天国から見守ってください！ ----- 杉浦嘉雄	4	
江袋先生の思い出 ----- 村口末弘	5	
江袋先生のこと ----- 梅本 登	6	
追悼 江袋先生 ----- 百武 充	6	
江袋島吉先生を偲んで ----- 松田道生	7	
江袋先生を偲んで ----- 長屋昌治	7	
江袋先生の思い出 ----- 島田利子	8	
江袋島吉先生へ ----- 増田友紀子	8	
餡ドーナツで始まる理事会の夜 - 箕輪義隆	9	
江袋島吉先生に捧ぐ ----- 箕輪多津男	9	
実践報告		
水元公園親子探鳥会 ----- 長屋昌治	10	
平成 11 年度講演会報告		
今、足元を見つめ直す時 ----- 箕輪多津男	13	
平成 11 年度講演会		
野鳥保護団体は今 一鳥業界の現状と未来 ----- 松田道生	14	
もりまき通信(9)		
水鳥たちの2000年問題 ----- 森 真希	22	
昆虫図鑑に想う ----- 箕輪多津男	26	
編集後記 -----	27	

故江袋島吉会長追悼

江袋島吉会長の死を悼む

副会長 渥美守久

江袋島吉会長が退院されたと、事務局から話を聞きました。自宅でさぞ退屈しておられるだろうと、最近の自然便り「四季旬報」をお送りしました。ところがそれから1週間も経たないうちに訃報に接し、愕然としました。会長は、全国愛鳥教育研究会を12年間にわたって引っ張ってこられた愛鳥教育の「顔」でもあっただけに、誠に痛恨の極みです。

1. 愛鳥教育の視点を変える

昭和53年、全国鳥獣保護実績発表大会で、東京の二子玉川小が栄えある環境庁長官賞を受賞しました。教育課程の中に『二子タイム』を設け、「自然に親しみ、生命の尊重と自然を大切にす心」を愛鳥教育の中心にすえて研究されていました。

ツバメの調査を通して、子ども達が地域の人々と心の交流を広げ、学び育っていくようすを聴いた私は強く感銘を覚えました。

その前年の昭和52年、私は都市化の進む田畑の中に出来た新設校、形原北小で愛鳥活動を始めたばかりでした。愛知県の事情も知らずに参加した県大会では「広げよう愛鳥の輪を」と題して、ヒバリの保護に取り組んだ児童会の活動を発表しました。ところが参加十数校の全てが、シジュウカラの巣箱や給餌を内容とした発表でした。私が二子玉川小の発表を聴いたのは、巣箱がかけられない学校での愛鳥活動に不安を感じていた時でもありました。当時、日本鳥類保護連盟の松田道生さんの誘いもあって全国大会を参観したのです。そこで、新しい愛鳥活動への幕を開いた二子玉川小に勇気づけられ、都市化の進む街にこそ環境に関心を広げることが必要であることを確信しました。後で知ったことですが、この時の二子玉川小の校長が江袋先生だったのです。

自然環境問題が社会的な課題となって、この大会の主催も林野庁から環境庁に代わりました。内容も「鳥獣保護」から「野生生物保護」へと、自然環境全体を視野に入れるようになって、今日に至っています。

2. 偲ばれる人柄

5月に開かれる「全国野鳥保護のつどい」では、江

袋会長との出会いを、毎年楽しみにしておりました。

先生は旅好きでした。ひょっこり蒲郡へ戦友会の旅行で来られたときには、三ヶ根山で、ゆっくり話を交わす機会がありました。戦友会「カモルタ会」の名簿を下さった。混成第37旅団通信隊として、満州から急遽、インド洋のカモルタ島に向かうようになったのだそうです。船で移動中、マラッカ海峡でイギリスの潜水艦に散々痛めつけられ、九死に一生を得られました。戦争で失ったも同然の命、第二の人生を教育に打ち込もうと決心されたのです。

会長は、リーゼントの頭髪にポマードがほのかに香る、いつも身だしなみのよい紳士でした。老後の楽しみをうかがったら、

「社交ダンスかな。家内も一緒にね。」

これには参りました。若い頃は甲子園球児であったそうで、立派な体躯のなぞが解けました。

愛鳥教育研修を蒲郡、伊良湖で開催するにあたっては、この研修を自然環境に明るい先生を増やすことにつなげたいと、教育委員会との接触など鋭意努力されました。西浦小「きじっ子の森」でのトンビの大歓迎に感激された日のこと、岬を渡るサシバを観察したことなども、今も私は懐かしく思い出します。

愛鳥教育の担い手である常務理事の先生方の創造性を重んじ、支えていらっしゃった先生の心の広さ、優しさを常に感じてきました。

葬儀には、教育関係者、教え子、戦友、ダンスの会の方でしょうか、愛研の仲間はもとより、多くの方々の焼香が後を絶たず、改めて先生の人徳と業績の大きさを実感させられました。

世の中が本当に身近な自然に目を向けなければならない時代になりました。愛鳥教育の果たす役割に期待し、何処の教育現場でも手引き書として役立つようにと、「愛鳥・自然教育のマニュアル化」を進めてきておりましたが、その完成を間近にしたその矢先のご逝去です。私たちは先生のお考えをさらに発展させるべく努力したいと思います。

江袋先生のご冥福を心からお祈りして、追悼の辞といたします。合掌

いつもの笑顔で天国から見守ってください！

副会長 杉 浦 嘉 雄

江袋先生には、私自身の（財）日本鳥類連盟職員時から（財）せたがやトラスト協会職員、日本文理大学教員時にいたるまで、15年間以上もの長い間お付き合いをしていただきました。

先生は、東京都世田谷区立二子玉川小学校の校長時代、全国鳥獣保護実績発表大会において実績校として環境庁長官賞を受賞される以前から、実に30年間以上に及ぶ愛鳥活動を実践されてきました。

私たちの研究会の会長になっていただいてからは、ますますそのお力を発揮していただき、また、いつも笑顔をたやさず私たちをねぎらっていただき、連盟と愛研のパイプ役にも徹していただき、今さらながら思い出しております。

私自身、3年前に九州の大分へ転勤してからは、先生に度々会えるということはありませんでしたが、連盟やせたがやトラスト協会職員の時には、お互いの仕事の合間に連絡を取りあい、よく喫茶店やレストランで、愛研の課題や将来のことについて数多く話し合ったことが思い出されます。

先生は、謙虚でシャイな性格な持ち主のため、余程のことがない限りいつも笑顔で淡々と話されましたね。側にいる私にまでその安定した心の波長が伝わってくるのか、いつも先生とのお話が終わった頃にはずいぶん心が和らいだものですが、このような経験を味わうことができたのは私だけではないと思っております。しかし、その先生が愛研の課題や将来に関して思っておられたこと、悩んでおられたことを、残された私たちや自分自身に言い聞かせるためにも、あえて、ここにまとめて明記いたします。

第1は、愛研の会員数や、事務局としてお世話になっている連盟の会員数が伸び悩んでいることでした。

第2に、愛研の財政が、なかなか厳しい状況にある中、その打開策がなかなか見えないという点でした。

第3に、その会員数を増やすピーアールも兼ねた研修会が、全国組織の割りにまだまだ実施回数が少ないことです。

第4に、会員交流のための会報誌「愛鳥教育」を定期的に出せる体制を組み切れていない点でした。

第5に、これらの問題を有機的に解決していくための根本的な打開策を、役員一丸となって切り開くことができないかという、私たちに対する期待でした。

先生のことでありますから、これらの課題の大半を先生ご自身の反省として、お話をされていらしたことが今さらながら思い出されます。もちろん、これらのことは、先生の思いを聞いた私自身や他の役員も含め、この会の課題であることは、間違いないことだと思っております。

怠惰な私は、先生のお元気なうちにそれを実行することができませんでしたが、先生、いつもの笑顔で天国から見守ってください！ 残った私たちは、先生の思いを具現化する努力をいたします。

江袋先生の思い出

監事 村口末弘

二月四日に江袋先生が亡くなられたという電話を受けた時には、びっくりしてすぐには信じられませんでした。というのは、亡くなられる二週間ほど前に関東中央病院で出合ったばかりでしたから。

ロビーの車イスの上で思案しておられる姿を見かけたので、

「江袋先生しばらくでした、どうかなさったのですか。」

と声をかけたところ、

「何か飲み物がほしいんだよ。」

とおっしゃいました。私は車イスを押して自動販売機の前に行き、お金を出そうとしたところ、先生は自分の手ににぎっておられたコインを自分で投入して緑茶を買われました。私たちはテーブルに戻り、二人で二十分ぐらいゆっくり話をすることが出来ました。その時が最後の別れとなってしまいました。

「殺しても死なないような巨漢。」中学時代は野球選手として、甲子園にまで出場されたとのこと。また第二次世界大戦中は陸軍将校(中尉か大尉か)として、南太平洋の第一戦で通信隊の指揮官として活躍中に、脚の太モモに銃弾を受ける大負傷をされたという話を聞いたことがありました。

先生が優しい中にも強じんな精神を持ち、私たち後輩や部下を指導してこられたのは、軍隊生活で培われたものにもよるのではないかと思います。

これから、先生が愛鳥教育にかかわってこられた足跡について述べたいと思います。

江袋先生が校長として赴任してこられてから三年ほどして、二子玉川小学校も愛鳥モデル校の指定を受けました。その翌年、全国鳥獣保護実績発表大会で環境庁長官賞を受賞しました。先生は、愛鳥教育を通して自然保護の心、地域社会を大切にすることを育てたいという哲学をもっておられたようです。

二子玉川小学校では、校内の愛鳥教育の推進はもちろんのこと、夏休み早朝親子探鳥会を始められ、毎回欠かさず参加されていました。

更に世田谷区のモデル校対象の山中湖での宿泊研修会、並びに多摩川(兵庫島)での世田谷トラスト協会の定例会(毎月)にも、ほとんど参加されて熱心に研修されていました。

会長に就任される以前から全国愛鳥教育研究会の総会には、毎年のように出席されていました。

1981年8月御岳山、1982年1月千葉県行徳野鳥観察舎、1983年1月上野公園不忍池、1984年6月長野県野辺山、1985年8月我孫子市山階鳥類研究所、会長就任後は、1989年7月長野県清里、1990年12月葛西臨海公園、1991年5月東京港野鳥公園、その後はよく知りませんが、多分毎年出席されてきたと思います。

全国愛鳥教育研究会の常務理事会にも毎回のように出席され、その責務を果たしてこられたのではないかと思います。

その他、「全国野鳥保護のつどい」「愛鳥懇話会」等にもよく参加されていたようでした。中国、ネパール等外国との交流・親善にも尽力され、実績をあげてこられました。

先生は見識が高く、常に高所大所から物事を考え判断して、行動されていました。

私たちは、まだまだ先生に教えていただいたり学んだりすることがたくさんあったのではないかと思います。誠に残念でなりません。

これからも江袋先生の愛鳥教育に捧げてこられた心を心として、愛鳥教育の道を歩き続けるようにしましょう。

江袋先生のこと

前常務理事 梅 本 登

昭和50年代の初めごろだったでしょうか。江袋先生は、東京都世田谷区立二子玉川小学校の校長先生として、3～4人の先生方と一緒に、東京都西多摩郡五日市町立戸倉小学校にお見えになりました。私は、愛鳥教育の担当として、下田澄子校長先生のご指導をいただいております。そのころの戸倉小学校は、私たち若い教師と子どもたちが、活発に活動を進めていました。環境庁長官賞を始め、文部大臣賞など、様々な賞をいただき、その名は広く知られていました。

ちょうどそのころ、世田谷区は、愛鳥モデル校の指定などを通して、環境教育の充実に力を注いでいた時だったと思います。二子玉川小学校もその指定を受ける準備をされていたのでしょうか。私と校長の下田先生が対応したと思いますが、記憶が定かではありません。

その後、江袋校長先生のご尽力により、二子玉川小学校が、愛鳥活動の実績を上げられ、高い評価を得たことは、広く知られているところです。このように環境教育が、少しでも広まり、受け継がれていくことを、私も心から喜んでおります。

愛鳥教育研究会が発足し、初代会長に田村活三先生、二代会長に下田澄子先生、そして三代会長に江袋島吉先生へと引き継がれてきたわけです。

以来12年間という長い間、愛鳥教育研究会のためにご尽力された訳ですが、本当にお疲れさまでございました。有り難うございました。初めてお会いしたときの、あの温かい顔が、心に残っております。

私は、満足なお手伝いもできませんでしたが、心から感謝申し上げます。先生、安らかに眠りください。有り難うございました。

追悼 江袋先生

(財)日本鳥類保護連盟事務局長

百 武 充

全国愛鳥教育研究会会長であられた江袋島吉先生が去る2月4日にご逝去されました。

日本鳥類保護連盟に関しては、先生は1991年から1994年まで評議員を、同年から亡くなられるまで理事を務めて下さいました。理事会では何回も議長をお務めになるなど、会務運営にもお力になっていただいた大切な方でした。

病を得て2年ほど前に手術された後も、お元気に会合にご出席下さいましたし、ご自分でも「21世紀まで働きたい」というご趣旨を口にしていられただけに、まだまだご活躍いただけるものと信じておりました。高校球児として甲子園出場も果たされたという大柄なお身体からも、そう簡単に病に敗れることはなかろうとも思っていたのでした。

それだけに、昨夏、奥様の押す車椅子で会議に出席されたときには、いつの間にそんなに…と心配になったものでした。しかし、その後もご案内を差し上げた行事には、すべてご出席くださり、誠実に職務を果たされました。短時間の会議ならともかく、丸1日にわたる行事もあって、そんなときにはずいぶんお疲れになるだろうにと、はらはらしながら拝見しておりました。

7日のご葬儀には各方面から大勢の方が参列され、先生のご交際の広さと遺徳とを改めて偲んだことでした。ご冥福を心からお祈り申し上げます。

江袋島吉先生を偲んで

顧問 松田道生

江袋先生に初めてお会いしたのは、もう20年以上前になる。まだ、全国愛鳥教育研究会はなく、私は日本鳥類保護連盟の職員だった。この頃、世田谷区役所の担当の方が愛鳥活動にたいへん熱心であった。そのため世田谷区立の小学校が全国鳥獣保護実績発表大会に参加しては高い評価を得ていた。そのような中で、当時、江袋先生が校長をされていた世田谷区立二子玉川小学校が表彰を受けた時だったと思う。

その流れのなかで、江袋先生から、全校の先生を対象にした講演を頼まれた。私は、小学校における愛鳥活動の例を知ってはいたものの愛鳥教育がどうあるべきか、はたまた現場の状況など多くの問題について頭の中の整理ができていなかった。それにもかかわらず、おおぜいの先生の前で話したのだから、今思えば汗顔のいたりである。

何を話したか私自身まったく覚えていないが、たぶんバードウォッチングの入門とか学校における愛鳥活動の実状を話したのではないだろうか。自分の話した内容は覚えていないが、江袋先生が寝てしまったことは今でも忘れない。いびきこそかいていないものの、こっくりこっくりと船を漕いでいた。私の話がつまらないのか、はたまた私を呼んでおいて愛鳥教育の導入には消極的なのかと心配してしまった。

しかし、その後で、江袋先生は愛鳥活動をより進めていくことを全校の先生の前で宣言された。集まった先生の中から

「これ以上、仕事が増えては困る。」

「これは、どの業務へ位置づけられるのか。」

などという、職員と管理者の微妙な議論がされた。部外者で愛鳥教育の勧めを話した私としては、身の置き所のない雰囲気であった。しかし、先生はさっぱりと愛鳥活動を導入し進めるという方針を話された。居眠りは、そうとうお疲れであったためなのだろう。私の危惧は杞憂であった。それは、その後の全国愛鳥教育研究会会長としての活動を見ても、おわかりの通りである。

一昨年暮れ、江袋先生は当会の私の講演会に病

江袋先生を偲んで

常務理事 長屋昌治

江袋先生に初めてお会いしたのは、もう15年ぐらいい前になりますが、いつも良くしていただき、大変お世話になりました。

特に、私が前任校（世田谷区立松丘小）で愛鳥教育を担当し、全国鳥獣保護実績発表大会（現在の全国野生生物保護実績発表大会の前身）に参加する事になった折、江袋先生はわざわざ、松丘小学校までお出で下さって、発表の仕方や内容などについて細かくご指導して下さいました。お陰様でよい発表ができ、よい賞も頂くことができました。本当に感謝しております。ご冥福をお祈りしています。

を押してご出席いただいた。私は、新しいネタの披露であるために受け入れられるかどうか不安であったが、先生から

「斬新な切り口でおもしろかった。」

と、お褒めの言葉をいただいた。おかげで、その後もこの演題は自信を持って披露している。この講演会が、先生とお会いする最後となった。

江袋先生との出会いは、私の講演で始まり講演で終わってしまった。最後の講演は、お眠りにならなかった。

江袋先生の思い出

常務理事 島田利子

先生は、本当に素敵なお人柄で、時々お目にかかれるのが楽しみでした。いつも穏やかで、ゆったりと構えられ、前向きな思考で、会のためにご活躍されました。

そして、多くの方々との面識があらわれ、私も江袋先生のお蔭で紹介していただいたたくさんの方々を知り合うことができました。

愛鳥懇話会（毎年12月に常陸宮様、華子様ご臨席の下に開かれる）では、面倒見のよい先生が私を会場内を連れてまわって下さり、殿下、妃殿下をはじめ、著名人の方々にご紹介くださいました。初めての時は夢のようでした。先生は次々に慣れた口調でお話され、また、係の方に写真を撮ってくださるよう声をかけてくださるなど、ただただ感心するばかりでした。お陰様で、普段はお目にかかれない方々との記念写真も先生と一緒することで数多く頂戴することができました。

愛鳥懇話会は立食パーティー形式ですが、先生は食欲も旺盛で、私にもよく薦めてくださいました。先生の元気の源だと思ったものでした。

また、全国野生生物保護実績発表大会では、私は前任校の秦野市立末広小学校と北小学校の時に発表会に参加させていただきましたが、先生には大変お世話になりました。審査員であられた先生から発表内容の感想やアドバイスをいただいたことが、次の活動に向けての活力になりました。

また、「全国野鳥保護の集い」にご同行させていただきました折、開催地での早朝探鳥会では、長い元気な足で歩かれ、意欲的に観察なさるお姿が印象的でした。

愛研の理事会では、いつも甘いお菓子を土産にお持ち下さいましたが、これが会議を盛り上げる要因の一つでもあったように思います。

ご家族が先生の喜寿のお祝いをなさったことを大変喜ばれていたことが印象的でした。その時は、奥様とのダンスを披露されたそうですが、私も一度拝見したいと思いました。

沢山の思い出をありがとうございました。

江袋島吉先生へ

元事務局担当 増田友紀子

先生、長い間、愛研（全国愛鳥教育研究会）の会長お疲れ様でした。先生は、いつも周りに気を配られて、大変そうでしたね。私は、何度となく先生のやさしさに救われました。

先生とは愛研の事務局担当として、連盟（財団法人日本鳥類保護連盟）の職員として、いろいろな所にご一緒させていただきました。愛鳥交流で、中国の方たちが訪日された際には、一緒に品川水族館に行きましたよね。実績発表大会の審査会では、先生が、

「増田さん、どの絵が好き？ それに投票するから。」

とコソコソと冗談をおっしゃられてました。でも本大会の時には、

「質問される所とされない所があるとかわいそうだから、皆にできるだけ質問することにしているんだ。」

という先生の人柄が見える一言もおっしゃってましたっけ。

愛研の研究会では、足柄山と一緒に登ったり、愛知県蒲郡に行ったりしましたよね。愛知では、私が側溝に落ちて、研究会の時にほとんど動けなくて、あの時はご迷惑をおかけしました。

一昨年、連盟主催の愛鳥懇話会の時に、

「ぼくに言うことはないの？」

と言われて、

「退院おめでとうございます。」

といった会話がありました。その時は顔色もよく、食欲もお有りになったので、言われるまで忘れていた位にお元気でした。

昨年の暮れの愛鳥懇話会では、車イスでしたが、お元気そうだったのに…でも、先生とたくさんお話できてうれしかったです。一緒に写真も撮りましたよね。とてもいい思い出になりました。

現在、私が連盟で働いていた頃よりずっと、一般の人たちが自然に関心を持ち始めています。しかし、今、都心で育つ子どもの多くが、自然の体験を持たずに成長しています。自然体験がないのに、授業では環境のプログラムがたくさんあるのです。い

江袋島吉先生に捧ぐ

事務局 箕輪 多津男

江袋島吉先生は、本研究会が1980年に発足する際に発起人として参画されると同時に監事に就任され、その後1988年に会長となられ、以来約12年間という永きに渡って会のトップとしてご尽力いただきました。それだけに、先生を喪ってしまった今、その存在の大きさを改めて実感させられるとともに、会の先行きを考える時、途方にくれるような思いに苛まれております。しかしながら、生前の先生の見事な体躯と、それに似合わぬようなやさしい笑顔、そして泰然自若としたお姿を思い浮かべるとき、改めて「しっかりしろよ」と励まされるようで、何とか気を取り直しているような有り様です。

私自身は、会の事務局を担当するようになってまだ足掛け5年程ですが、その間大した役目も果たすことができず、先生に対して申し訳ない気持ちで一杯ですが、それも今となっては後悔先に立たずで、詮ないこととなってしまいました。

先生は、研究会主催の諸事業はもちろんのこと、環境庁や(財)日本鳥類保護連盟が主催となって実施している「全国野生生物保護実績発表大会」や「愛鳥週間用ポスター原画コンクール」等の審査員をはじめ、テグス拾いや国会議員の方々の参加のもとに実施する国会周辺の巣箱架け、さらには(財)せたがやトラスト協会が主催するバードウォッチングに至るまで、あらゆる行事に足を運ばれ、その旺盛な行動姿勢にはいつも頭の下がる思いでございました。そして、その場その場で先生のお姿を見かける度に、私はえも言われぬ安心感を覚えたものです。

また、先生の誰に対してもさりげなくさされる気配りも、とても真似のできないことであったように感じます。不束な私のような者に対しましても、具体的に挙げれば切りがない程、いつもお気遣いをい

餡ドーナツで始まる 理事会の夜

(財)日本鳥類保護連盟

箕輪 義隆

日本鳥類保護連盟に在職して1年間ほど愛研事務局を担当しました。私にとって、この期間が江袋先生と一番多く接していた期間です。

毎月1回の理事会の日、一番に事務所にやって来る江袋先生は、必ず甘いお菓子を買って来られます。餡ドーナツ、シベリア(カステラの間にこし餡を挟んだ和洋折衷のお菓子)などが定番でしたが、夏にシュークリームを買ってきた時は、「こっちの方が評判イイみたいだよ」と嬉しそうでした。

若い先生方を後押しする立場でいたい、というお気持ちだったのでしょか。皆にお菓子を振る舞い、議論に聞き入る先生の姿を懐かしく思います。

ただき、その度に救われるような思いでございました。感謝の意を申し述べたくとも、適わぬこととなってしまいました。天上におられる先生に対し、せめてここに合掌を捧げたく存じます。

さりながら、先生の残されたご遺志をしっかりと胸中に刻みつつ、私も今後の道のりをしっかりと歩んでいきたいと思っております。後ろ向きな姿勢は、先生の最も嫌われるところであったはずですので……。

最後に、改めて先生のご功績に感謝の意を表しますとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

いろいろな意味で、これから先、愛研の存在意義が今より一層強くなる時ではないでしょうか。やれやれとお思いでしょうが、空の上から愛研と子供たちの

今後を見守っててくださいね。

とりあえず、私が先生の所まで行くまではさよならです。先生、本当にありがとうございました。

水元公園親子探鳥会

常務理事 長屋 昌 治

平成 12 年 1 月 30 日（日）、親子を対象にした野鳥観察会を、都立水元公園で行いました。

10時に水元公園の中にある「かわせみの里」に集合し、大場川に沿ってゆっくりと観察を始めました。マガモやヒドリガモなどのカモ類、バンやカモメ類を近くでしっかりと観察することができました。お昼は「緑の相談所」でお弁当をみんなでいっしょに食べ、最後にバードサンクチュアリーでカウウやアオサギなどを観察して解散しました。

都立水元公園は東京都の北東部の端にある小合留に沿って造られた都内でただ一つの水郷の景観をもった公園です。広さは約 70ha あり、バードサンクチュアリーや観察舎など野鳥観察の施設をはじめ、水性植物園、バラ園、芝生広場などがあり、都民のいこいの場所になっています。

野鳥も水鳥を中心に年間 100 種類以上確認され、特に、冬はカモ類やカモメ類など多くの野鳥が飛来し、羽を休めています。

今回の親子探鳥会の参加者は小学生を中心とする約 20 人の親子で、全員が初めての探鳥会。間近にいるマガモやヒドリガモの羽の色のきれいさ、オオバンやバンの首を振って泳ぐユーモラスな姿に感激していました。

お天気にも恵まれ、真冬という時期にも拘わらず、あまり寒さを感じることなく、ゆっくりとカモ、カモメ、サギ類など 30 種類も観察できました。また、お昼も屋外で、上着を脱いで楽しく食べることができました。子ども達の全員が満足し、次回もぜひ参加したいと、顔をほころばせて帰って行きました。これからも、参加者が満足できる観察会を計画したいと思います。



〔参加者の感想〕

親子探鳥会に参加して 江南久美子

1月30日(日)、娘と二人で初めて探鳥会へ参加させていただきました。娘の担任の先生が自然について詳しく、学校でも折にふれて、鳥をはじめ植物のことなど教えていただいている事は娘より聞いていました。このご案内をいただいたとき、家の用事が山ほどたまっている私にとって申し訳ないけど欠席しようと思っていました。しかし、この探鳥会の前、たまたま授業参観があり、先生がスライドを映写しながら、鳥の事を取り上げて授業をなさいました。それを見ていた私も興味が湧いてきて、娘も是非行きたいとの事なので、思い切って参加しました。

朝早く起きて、お弁当を作り、水元公園へ行くと、そこはとても静かで、空気も澄み、広い公園の中の木々に囲まれていると、日頃忙しい生活の中で忘れていた感覚がよみがえり、とても気持ちのよいものでした。

そして、いよいよバードウォッチングの開始です。この日の参加者は大人、子供合わせて約20人、スタッフは担任の先生を含めて5名でした。探鳥会は驚きと感動、そして感心させられる事の連続でした。それをいくつかご紹介しましょう。

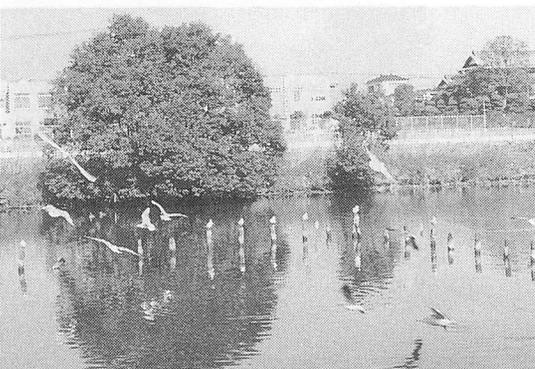
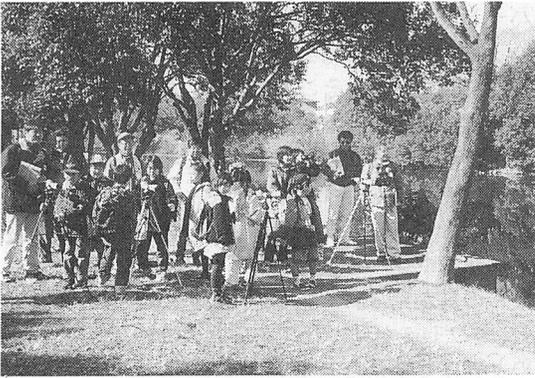
まず、カモの群がいて、そのカモは何ガモかを子供達が答える場での事です。双眼鏡で見るとなんと美しい色でしょう。子供達は頭の部分が緑なので、「マガモ!」「スズガモ!」「ハシビロガモ!」などと図鑑を見て答えるのですが、スタッフの方が「そうだね、頭は緑だね。じゃ、くちばしの色はどうか。胸のところは、足はどうなっている?」と子供達にアドバイスをして、正解へと導くのです。さすがです。最初から答える事なく、子供達に細かいところまで観察させるテクニックを教えてくださいました。私もきちんと正解にたどり着くことができました。

また、みんなで歩いていると

「あっ、アオジだ。」

と言って、スタッフの方が見つけてくれた鳥がいました。そこには、私にはスズメかと思うほどの小さな鳥が土の中のえさをとっていたのです。アオジの胸の部分はそれは美しいうす緑色で、思わずみんな「きれい!」

の声。私がスタッフの方をふと見ると、



「本当にきれいだな！」

と感心して見入っていました。何回となくこの鳥を見ていらっしゃると思う方達が参加者と同じように喜んでおられる姿を見て、また、驚いてしまいました。本当に鳥がお好きなんですね。

歩きながら、カルガモの話となり、私が

「カルガモって皇居にいますよね。」

とスタッフの方に話しかけたところ、ほとんどのカモが日本では冬しか見ることができないのに、カルガモは1年中見ることができる。また、他のカモはオスメスはっきり色の違いがあるが、カルガモにはそれがなく区別しにくい。普通「軽ガモ」と書いているが、「夏留ガモ」と昔は書いていた。などなど、次から次へと話題がつきず、なるほどとひとしきり感心しました。

このほか、水かきのないバン、凜とした姿の美しいアオサギ、私の見たかったハクセキレイの話などお伝えしたい事がありますが、長くなってしまうのでこの辺にいたします。

以上、私にとって予想をはるかに上回る有意義な楽しい時を過ごす事ができました。ぜひ、皆さんも一度参加されてみてはいかがでしょうか。

最後にスタッフの皆様本当にありがとうございました。

探鳥会に行つて 小学校3年 江南友香

私は鳥をあんまり知りません。私の先生が鳥や生物のことをよく知っていて、この観察会のことを教えてくれたので、お母さんと一緒に行ってみました。観察するところは水元公園です。友達も来ていて、いっしょに観察しました。いろいろな鳥を見て、先生達がわからないことを教えてくれました。

私が一番よかったなあと思う鳥はバンです。バンはカモとちがって、水かきがありません。だから、足で水をかけて進みます。けるたびに顔が前へ行ったり、後ろに行ったりするのでおもしろいな、と思いました。またこのようななきかいがあったら、ぜひ行って観察したいです。

バードウォッチングの感想 小学校3年 佐藤拓巳

1月30日に水元公園にバードウォッチングに行ってきました。そこで、野鳥について、多くのことを学びました。たとえば、カモメはくちばし、足の色で見分けること。カモはメスの色がみんな茶色で見分けかたがむずかしいこと。カラスは23区に2万羽もいることなどです。カモやカモメ以外にもダイサギやコサギ、ハクセキレイ、モズなど、たくさん鳥が見られて、とても楽しかったです。しかし、カワセミが見られなかったのは残念でした。次のときはぜひ見たいです。

親子探鳥会 小学校3年 菅野絵美子

1月30日に水元公園の親子探鳥会に行きました。集合場所のかわせみの里では、コサギがいました。バードウォッチングではバンやカモやカモメを見ました。バンが泳ぐとき、カモとちがって水かきがないので、首を前にふったり、後ろにふったりしていました。私はハトが歩くときに似ているなと思いました。また、カラスの巣も見ました。カラスの巣はハンガーでできていることにおどろきました。とても楽しい親子探鳥会になってよかったです。



平成11年度講演会報告

今、足元を見つめ直す時

事務局 箕輪 多津男

去る平成11年11月12日(金)、東京都生涯学習センター・セミナー室において、昨年度に引き続き講師に松田道生氏を迎え、全国愛鳥教育研究会主催の講演会を開催しました。

当日は、約20名の参加をいただきましたが、質疑応答も含め1時間30分の間、それぞれの方が真剣な面持ちで講演に聞き入る姿が大変印象に残りました。

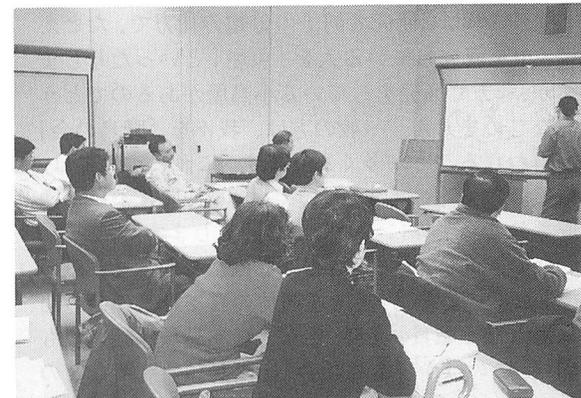
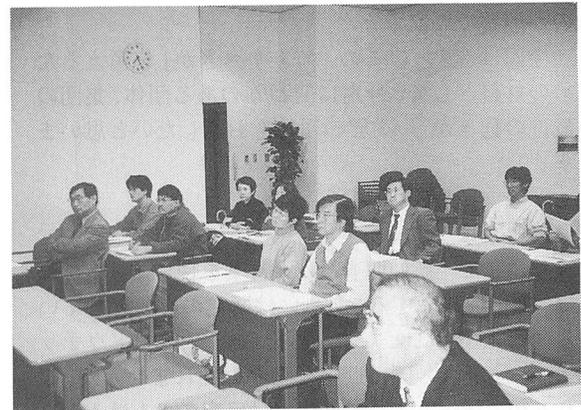
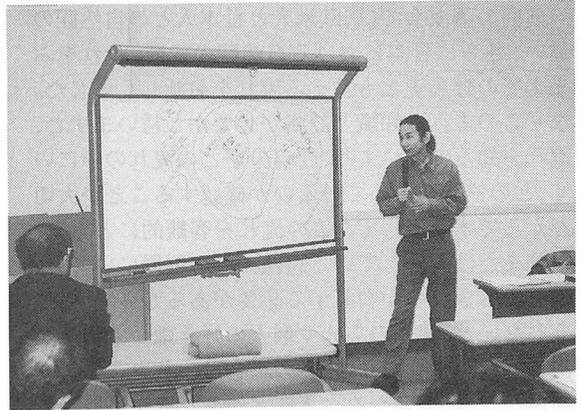
スケジュールに従い、染谷優児常務理事による挨拶および全国愛鳥教育研究会の活動紹介の後、松田氏の講演に移りました。

内容の詳細については、昨年度と同様、本紙に同時掲載されているご自身の『野鳥保護団体は今』をお読みいただければと思いますが、いわゆる“鳥業界”と呼ばれる世界のこれまでの歴史と現状について、松田氏ご自身の深い理解と鋭い洞察により、熱く語っていただきました。特に、事例として挙げられた様々なエピソードは、ご自身の体験に裏打ちされた確かなものであるだけに、参加者に対して強い説得力を持ちえたのではないかと思います。

また、野鳥保護に関わる団体に対する様々な指摘に関しては、聞く側にとっては身につまされたり、時には冷汗をかかされたりといった具合で、終了まで少しも気の抜けない思いがしました。

全国愛鳥教育研究会も発足以来20年を迎えようとしておりますが、今一度原点に立ち返って、足元を見つめ直す時であると痛感させられた次第です。そして、21世紀に向けていったい何をしていけばよいのか、自ら立っているところの位置をしっかりと見極めながら改めて考えてみたいと意を新たにいたしました。

終わりに、今回の講演会の開催にあたり、ご参加およびご協力いただきました多くの方々に、改めて心よりお礼申し上げます。



野鳥保護団体は今

—鳥業界の現状と未来—

全国愛鳥教育研究会顧問 松田道生

前回の講演会では、欧米人と日本人との自然観の違い、さらに日本における自然観の変遷、それをふまえての野鳥史とも言える流れをお話ししました。なぜこのような知識と認識が必要かと言いますと、流れを知ることにより、今自分がどの流れの中にいて、どの位置を占めているのか確認することが大切だからです。そして、この流れを客観的にとらえ、自分または所属している組織がどの位置にいて、何をすべきなのか判断する必要があるからです。そうしないと、個人の趣味や個人の好き嫌いで物事が決まってしまうたり、組織の場合はマスコミ先行で物事が進み、本来やるべきことがおろそかにされてしまうからです。少なくとも指導的な立場にいる方々は、社会的な責任を果たして欲しいからというのが趣旨でした。

今回は、さらにこの「何をすべきか」を考えるための材料として、野鳥に関わりのある団体、集団の最近の動きから、業界の現状をお話したいと思います。

鳥業界とは

私はよく「鳥仲間」という言葉を使います。これは、鳥を趣味とする、あるいは研究の対象としている同好の士のことです。おそらく、「バードウォッチャー」がいちばん近い言葉かも知れませんが、これも後で述べるように厳密には研究者の人は入らなくなりますので、適切ではありません。

同様な意味で「鳥屋」という言い方をする人もいます。これは、研究者同士の分類の仕方です。たとえば、虫を研究している人を「虫屋」といったりしますが、一方で商売をしている小鳥屋があるのでどうもなじみません。一般の方は、我々を「野鳥の会」と言われることが多くあります。これについては、後で詳しく述べます。ここでは、鳥仲間によって構成される鳥業界についてのお話をします。

私の言う鳥業界には、どんな人たちが含まれるのでしょうか。まず、野鳥関連団体の日本野鳥の会の関係者となる職員、支部、会員。日本鳥類保護連盟も同様。このほか日本鳥学会、山階鳥類研究所などの

研究者。行政では、環境庁の野生生物課、林野庁の森林総合研究所、各都道府県の鳥獣保護係と鳥獣保護員。ここまでは、仲間だなどはっきりと実感できると思います。でも、飼鳥の関係者は別だと考えています。

さらに、周辺の業者がいます。たとえば、バードウォッチング用を中心に双眼鏡や望遠鏡を制作したり販売したりしているニコンなどの光学メーカー、「バーダー」などの雑誌、鳥類図鑑を発行している出版社といったところでしょうか。

このほか、鳥業界の境界には、団体では日本自然保護協会、世界野生生物基金などの自然保護団体があると思います。さらに、大日本猟友会も境界上に位置づけられるでしょう。

鳥業界とは何か、どこが境界線上か、定義と範囲をお考えいただき認識していただきたいと思いません。

3つの“野鳥の会”

私が日本鳥類保護連盟（以下、連盟）の職員だった時に、日本野鳥の会との違いを説明するのに苦労をしました。寄付や活動の支援をもらうときには、かならず「連盟は、野鳥の会とどう違うのですか？」と聞かれました。また、私のことを知ると「ああ、野鳥の会ですか。」といわれます。そのたびに、また連盟と野鳥の会との違いを説明しなくてはなりませんでした。

私が連盟を退職した頃のある日、六義園で郊外から来たという自然観察会のグループに出会いました。どんなことをしているのですかとたずねたら、野鳥を見ているというので、「ああ野鳥の会ですか。」と私が言ったところ、「いいえ、〇〇自然観察の会です。」と、リーダーの方がきっぱりと言われたのを今でも覚えています。そのとき、「あっ！」と気がついたのです。私が言った野鳥の会は、日本野鳥の会ではなく、バードウォッチングの会くらいの意味だったのです。いわば、鳥仲間、鳥業界の人たちですねというくらいの意味だったのです。しかし、相手は日本野鳥の会の支部でも会員でもありま

せんで、きっぱりと否定したのです。そこで気がついたのですが、私が間違えられたと思って一生懸命、連盟との違いを説明した相手も、実は「野鳥関係の方ですね」というていどの意味で言われていたのかもしれないと思ったわけです。

その後、日本野鳥の会の職員になり、職員や支部の人たちとも話すのですが、彼らは「野鳥の会ですね」と言われれば、当然日本野鳥の会関係者なので、間違われたとは思わずに話をしているということに気がついたのです。

これは、セロハン・テープをセロテープというのと同じです。セロテープはニチバンの商品名ですが、これが一般名称にもなっています。同じように、味の素、ガムテープ、ホッチキス、マジックなどなど、私たちの周りには、商品名が一般名称になっているものがたくさんあります。まだ望遠鏡のことをプロミナーと言う人がいますが、ニコンの人に「ニコンのプロミナーって良いですね」と言ってもちっとも喜ばれませんし、ゼブラの社員に「そのマジック取ってくれよ」と言ったら「これはマッキー！」と訂正されるでしょう。これと野鳥の会も同じだったのです。これは、日本野鳥の会に良いことでもあるし、難しい問題を抱えてしまうこともある不幸な問題でもあるのです。

さらに、日本野鳥の会を組織としてみると、財団法人日本野鳥の会と日本野鳥の会との区別があります。財団法人日本野鳥の会は、私も在職した事務局です。これには正社員、パート、バイトを入れると100人くらいの方が関係しています。これは、法人ですから会計処理も税金もこの100人の人たちの働きによって、独自に処理されています。

日本野鳥の会は現在87支部あり、入会している会員が50000人です。各地の支部の活動費は、本部からはまったく切り離されて独自に会計処理されています。また、活動は各支部の自由裁量にまかされています。

たとえば、(財)日本野鳥の会の事務局の見解というのは基本的には統一されています。湿地について、あるいは密猟についての意見は職員間でも統一されています。統一見解がまだ出されていない場合は保留とし、担当者が考えます。ですから極端なことを言えば、日本野鳥の会の一職員の意見として「この埋め立ては賛成だ」とかいう意見が出ることはありえません。私が在職中は、100人たらずの職員ですので月1回の幹部会議で方針が決められ、

緊急な問題は毎朝の打ち合わせで伝達されていました。

しかし、各支部や各会員は自由にものを言っていることですし、言えます。なかには、支部長と支部幹部で意見の相違があるといったことがしばしばありました。基本的には、ボランティア組織なので、支部ないし会員すべての見解が統一されているというもおかしなものです。ただし、事務局と意見が合わないということで支部が独立した組織になった例はあります。

ですから、ここで一口に「野鳥の会」といった場合、連盟なども含めた鳥業界という意味と、支部や会員を含めた日本野鳥の会と、事務局だけの財団法人日本野鳥の会の3つがあることを認識していただきたいと思います。

日本野鳥の会の幸、不幸

このように違いを確認することが、物事を検討したり議論をしたりするときには重要なこととなります。

間違われることが「日本野鳥の会に良いことでもあるし、難しい問題を抱えてしまうこともある不幸な問題」と前述しました。良いことは、野鳥の会といえども何も説明しないでわかってもらえるネームバリューの便利さです。私は、在職中はシャネルやクリスチャン・ディオールのように「ブランド」だと言っておりました。さらに「日本野鳥の会は、鳥業界では最大で最高のブランドであり、あり続けるようにがんばろう」と言っていました。

反対に、不幸というのは、この便利さがゆえ、説明の手間を省いてしまうことです。説明を受けない相手には組織の実状が伝わりません。私が接した多くの業者、会社の人は、日本野鳥の会を過大に評価するか過小に評価するかのどちらかで、なかなか的確に理解してくれる人はいませんでした。

さらに「野鳥の会は……」といっても、単にパードウォッチャー全体を指しての批判であるのに、まともに自分たちの組織のこととして受けとめてしまい、しなくてもよい議論をしてしまいます。そういったことで、うるさい団体のイメージを作ってしまうことが多々あります。

独自に活動している団体も日本野鳥の会といっしょにされてしまい、その反発が何の罪もない日本野鳥の会へ向けられてしまうことがあります。

たとえば、日本野鳥の会と連名で陳情書を出した

りシンポジウムを開催したりすると、新聞には、「野鳥の会」が陳情とかシンポ開催と書かれ、自分の関係している団体の名前が出ないことがあります。記事を書く記者は、わかりやすい名称、一般名称に近い名称の野鳥の会と書いているのだと思います。しかし、同じ活動をしていても自分の組織の名前が出ないのは、上司の手前もさぼっているように思われるし、おもしろいことではありません。

私はよく「野鳥の会で、がんばっていますね」と言われます。私は、昔も今も先輩や友人が日本野鳥の会の事務局にいましたから、さほど感じるものはありません。鳥業界そのものが活性化することが野鳥のためになると思っていますので、日本野鳥の会の発展は歓迎です。しかし、自分が所属している組織に対し一生懸命であればあるほど、そういわれると、その反発は日本野鳥の会に向けられてしまうということがあります。

いろいろな業界の中では、それぞれ細かい区別がなされています。私たちがハシブトガラスとハシボソガラスを区別することで生息環境の違いがわかるように、言葉の区別を理解してはじめてその業界の人の会話が成立します。

では、ここで問題です。鳥業界において、次の言葉の違いをみなさんはどのように理解していらっしゃいますか。

プロとアマチュア

バードウォッチャーと鳥類学者

観察と調査

調査と研究

報告書と論文

保護と愛護

保護と保全

いずれも区別が難しいもので、実際、曖昧なままに使われています。自分は今何をやっているのか、自分をどこに置くのかを知るためには、これらの言葉の違いを明確にし、スタンスをはっきりさせることが必要だと思います。たとえば、自分はプロなのかアマチュアなのか。バードウォッチャーなのか鳥類学者なのか。今やっているのが観察なのか、調査なのか、あるいは研究なのか。今書いているのは報告書なのか、論文なのか。たえず自問自答する必要があります。と思います。

答えは各自で考えていただきたいと思いますが、私なりの回答を示しておきます。

プロとアマチュアは、それを職業としているかい

ないかの違いではっきりとしているようですが、意識（プロ意識やアマチュア根性）という意味ではまったく曖昧です。団体職員であり給料をもらっている人がいるかもしれませんが、また、カメラマンのなかには、プロでありながら腕、意識ともアマチュアの者、アマチュアでありながら腕、意識ともプロの人もいます。私なりの答えのひとつは、プロは金で動く、金を動かす。アマチュアは心で動く、心を動かすです。

バードウォッチャーと鳥類学者の違いは、前回の講演がその答えです。主観的に鳥を見るか、客観的に鳥に接するかの違いでしょう。以下は、お考えください。

シェアはどのくらいか

各業界で問題になるのは、自分の会社がどのくらいその業界で市場を占めているかを示す数字、シェアです。たとえば、今までキリンが独占していたビール業界は、アサヒのスーパードライの登場で大きく変わりました。また、シェアを占めすぎれば独占禁止法に抵触することになりますから、この数字には各業界ともたいへん神経質です。

では、鳥業界はどういった数字になるのでしょうか。

たとえば会員の数字を見てみましょう。日本野鳥の会が50000人、バーダー読者10000人、連盟が数千人、日本鳥学会が1000人としますと、日本野鳥の会が7割以上を占めていることになります。

しかし、ここで問題なのはダブリがあること。さらに、バードウォッチャーすべてが組織化されていないということがあります。たとえば、ニコンのフィールドスコープは発売以来20年たっていますが、10年間はモデルチェンジなしで毎年10000本を出荷していました。あの機種はバードウォッチング以外の使用は少なく、販売もバードウォッチャーを対象とした方法を取っています。なお、コーワのスポッティングスコープは、射的のシェアが大きいので出荷台数イコール、バードウォッチャーの数にはなりません。

この数字から単純に10万人、あるいはスコープを購入する段階まで至らないバードウォッチャーも多いはずですから、50～60万人の愛好者がいるとの判断もできます。事実、ニコンは、この数字を元に事業を展開しています。この数字から判断すると

日本野鳥の会のシェアはわずか1割ということになります。

事業規模では、いかがでしょう。実際、公表されている数字がありませんので、正確には比較しようがありませんが、財団法人日本野鳥の会の事務局の年間の予算規模は10億です。おそらく、この数字からでは7割以上を占めていると思います。ただし、これも双眼鏡メーカーの売り上げ、関係図書（日本野鳥の会も図鑑を販売しているのだから同じ土俵にいれるべきかもしれない）の売り上げも業界の一部として組み入れますと、もっと数字は少なくなり、1割程度になるかも知れません。

また、実際の数字と体感する数字が異なる場合もあります。鳥業界の場合はどうでしょうか。私の印象では、現在日本野鳥の会が支部を含めて7割、連盟1割、その他2割といった印象があります。

シェアについては、正確な数字を求めることが難しい業界ではあります。しかし、こういった意識で自分の業界を見る必要があるではないでしょうか。

日本野鳥の会はNECだ

いずれにしても、日本野鳥の会を研究、観察することが、日本の野鳥保護、バードウォッチングに関する問題を語るためには必要だと思えます。

10数年以上前からコンピュータを始めた方は、きっと使用機種はNECの98シリーズだったことでしょう。シェアは7割と言われていましたが、実際私の周辺では100%、皆、98シリーズでした。値段が高く、デザインも野暮ったく、使用勝手も決して良いものではありませんでした。しかし、MACが良いと言われても、仕事上、友人知人とのデータの互換性を考えると、98シリーズを使わざるをえませんでした。皆、文句を言いながらも98シリーズを使ったものです。

これと同じことが、日本野鳥の会についても言えます。実は、同じことを15年前の日本野鳥の会の職員を前にしての講演でも話したことがあります。

当時、野鳥に関わったこと、バードウォッチング、保護に関したことで何か事を起こそうとした場合、日本野鳥の会と関わりなく物事が進めることはできない状態でした。さらに、研究センターを発足させたことで、研究部門に関してもその地位を確立させた感がありました。また、支部もほぼ全国的に発足していましたので、地方でも状況は同じです。今もそれに近い状態ではありますが、10数年前はシェア

が90%というのが実感される数字だったと思います。たとえば、どんなに日本野鳥の会が嫌いでも、図鑑は「フィールドガイド日本の野鳥」を使わざるを得ないのです。

現在、コンピュータでのNECのシェアは25%程度に落ち込み、98シリーズは無くなったと言える状態で、DOS/V陣営が7割といったところでしょうか。コンピュータに関しては、市場が爆発的に拡大しているので、NECのシェアが減ったとはいえ毎年の売り上げは伸びています。これにより私たちユーザーは、どのメーカーのどの機種を購入するか、選択肢が多くなりました。その結果、安くて良いものを手に入れられるようになってきました。

鳥業界の方は、いかがでしょうか。端的に言って、やはりいろいろな団体が、それぞれの色を出し、それぞれの分野で活躍するようになったと思います。たとえば、「雁を守る会」「全国野鳥密猟対策連絡会」「ワシタカ研究会」などの1種ないし仲間鳥、あるいは特定の問題について取り組んでいる組織の活動がめざましいものがあります。また、各地の保護団体も活動がすっかり根付いた感があり、それぞれ実績を上げていえるでしょう。コンピュータのNEC同様、日本野鳥の会のシェアが狭くなったのではなく、これらの組織の活動が加わることによって、パイが大きくなったというのが実状だと思えます。

また、コンピュータ以外のたとえでいうと、日本野鳥の会という巨大なデパートが進出してきて、一時は商店街の客をデパートに取られたが、町が活性化して特色のある専門店が出店し、町全体が大きくなったというふうにも考えても良いかもしれません。

このように日本野鳥の会の存在と活動が、この業界に大きく影響していることには違いがなく、日本野鳥の会の活動の評価と動向、活動理念などを研究し、今後もウォッチングしてゆくことが必要だと思えます。

鳥業界を社会から見たら

さらに現状認識を深めるために、客観的にこの業界を見てみましょう。

まず、なんといっても業界はまだまだ狭いということでしょう。日本野鳥の会の会員が、数千人だった頃に比べてみれば、はるかに大きくなりました。しかし、世間一般の常識から見れば、まだまだ小さな世界だということなのです。

これは、比較が難しいことですが、イギリスやアメリカの同種の団体の会員数は100万人単位。組織化されていない人を含めると1000万人という数字からも納得できるだけの層を誇っています。これと比べると、はるかに小さな数字です。ちょっと古い数字ですが、15年前のアメリカの庭に来る小鳥のための飼料売り上げが400億円です。ということは、これに関わって生活している業界の人もたくさんいるということ、それはとりもなおさず野鳥のために、あるいはオーデュボン協会のために一肌脱いでくれる人がたくさんいるということです。

また、日本野鳥の会の会員が数千人だった時代が、たいへん長かったわけですが、1970年代当時までも、いろいろな本が出ています。かなり専門的な本も出版されています。この頃でも、専門書の発行部数は、3000～5000部。3000部以下の数字では採算に合わないので事業として本が発行されることはまずなく、少なくとも3000部は出ていたはずですが、しかし、現在会員数は20倍になっても相変わらず専門的な本は3000部の状態で、せいぜい5000部どまりというのが実状です。これは、層は広がったものの深さが足りないということを物語っているのではないのでしょうか。

今年はじめて日本鳥学会に参加しました。3日間の研究発表大会というイベントと思っただけならば良いでしょう。参加していろいろ思うところがありました。まず、かなりの人が顔なじみの方々に日本野鳥の会の場でも会うことのある人でした。結局のところ、同じ業界であることを確認することになりました。さらに、この人たちの仲間内の場でしかないということです。仮に研究発表であれば、社会的にも関心を持たれ、外部の人たちがたくさん入ってきてよいと思うのですが、それはわずかででした。たとえば、カワウの被害の問題で漁業関係者が参加していた程度です。発表者のなかに環境アセスメント会社の人でしたが、これも結局は元バードウォッチャーのようで、結局は同じ業界の人といっても良いでしょう。

要するに、社会的な貢献度が少ない、一部の趣味の世界、と言われてもしょうがないと思いました。これは、日本鳥学会だけの問題ではなく、この業界に共通して言えることでもあります。別の言い方をしますと、一般社会に対する業界からの発信情報が少なく、結局は小さな村の中での活動に過ぎないのです。その結果、社会的な認知度は低いということ

になります。自然保護や環境問題など社会的に貢献度の高い活動に取り組んでいるはずなのですが、これが実状です。

もうひとつの見方をすると、業界からの出身者で社会的に活動しているがいないということもあります。たとえば、かつての中西悟堂や山階芳麿は鳥に興味のない人でも知っている名前でした。これだけ野鳥や自然に感心も持ってもらえる時代になっても、両巨頭のネームバリューに匹敵する人物が現れないことも実状の一つです。

私がNHKや出版社にバードウォッチングや野鳥の企画を出すと、担当者は面白がって乗っていても、上に上げるとボツになります。ごく一部の趣味の世界のことだから売れない、視聴率が取れないというのが理由です。これが、一般的な見方です。通るのは、たとえば野鳥歴の長い人、絵を描いている人など、こんな変わった人がいるという企画です。私も鳥好きの変わったオジさんというキャラクターで取り上げられているのです。この前、言われたのは「浮き世離れした人たち」というものでした。私たちがバードウォッチングで野鳥を見て面白いと思うように、世間からは私たちを見ると面白いと思われるであろう、この状態もよく認識しておきましょう。

また、私たちにとっては、野鳥に関わること、バードウォッチングはメインですが、客観的に見るとどうでしょう。たとえば、趣味のバードウォッチングは、アウトドアという世界の中のごく一部に過ぎません。メインはかつては登山、現在はオートキャンプです。社会的に貢献している自然保護の問題では、オゾンの破壊、熱帯雨林のほうメインで、これらの項目の中の野生生物の問題、そしてその中の鳥類に過ぎません。あくまでも、サブキャラの存在であることが多いのです。

要するに、たいへんマイナーな世界であるということ、狭い世界にいるということを再度確認していただきたいと思います。そして、このマイナーとメジャーという認識が、けっこう大きな問題になります。たとえば、今度環境庁が省になり、かなりメジャーとなりますが、今までは国というもっともメジャーな世界の中で、マイナーな組織でした。いわば、ミニ・メジャーです。日本野鳥の会は、この業界ではメジャーです。しかし、業界全体はマイナーなものですから、ピック・マイナーな存在なのです。このひずみが、組織の中の人間の意識、あるいは外

から見たときの人間の認識を狂わすことになり、あらゆる軋轢を生じさせることにもなりますので注意しましょう。

たとえば、「〇〇を守る会」などボランティアだけで数10人の会、「〇〇野鳥の会」などのサークルも同様、とてもマイナーな存在です。そういった人たちにとっては、マイナーであることが魅力です。「清く貧しく美しく」というこだわりが活動に駆り立てます。このような人たちにとっては、行政はメジャーで敵対する対象になります。そして、ビッグ・メジャーな日本野鳥の会も同様。日本野鳥の会批判の発端は、メジャー指向の日本野鳥の会本部とマイナー好みのボランティア団体との意識の違いがあると指摘された人がいましたが、当たっているかもしれません。

小さいほど有利になるか

ここまでが、現状認識です。これらを踏まえて将来、鳥業界がどのように展開するのか、どうすればよいのかを考えてみましょう。

今まで、話してきたような議論がほとんどなされていないのが、この業界の問題点でもあります。議論をすることにより認識の違いを確認することができます。理念を構築し、より発展するためには論争、議論が必要なことだと私は思います。

しかし、実際には、仲間内の“なあなあ”の雰囲気の中かで物事が進んでいると思われるようなことがあります。そしてまた、議論したり、反論したり、自分なりの意見を持ったたりすることを、あたかも対立した勢力のように思ってしまう、思われてしまう、その怖さから議論を避けているのではないのでしょうか。

ここで、私のこういった意見を批判ととらえられては困るのです。中には、耳が痛いようなことがあるかもしれませんが、こういった見方もあることを謙虚に受け止めた上で意見を戦わせる必要があるのです。まず、業界の発展のために大いに議論をしましょう。

これからの鳥業界がどう展開していくか。まず、小さなサークル、ローカルなグループ、専門的な組織の活動が活発になるでしょう。ボランティアの集団でもNPO法案により、法人格を持って対外的な活動ができるようになったことがその一例です。

次のキーポイントは、インターネットなどの情報化時代にうまく対応できるかどうかです。私は、他

の仲間と共に今年の夏、日光野鳥研究会を発足させました。まだ、会員は十数名なのですが、情報のやりとりはE-メールですし、ホームページを見れば会員がいつでも情報を供用できる体制をとっています。今までのこういったサークルですと、会報の編集、印刷、発送が、人力的にも費用的にも多くを占めていました。しかし、インターネットを活用することで、これらの業務をかなり減らすことができ、本来の情報の収集や啓蒙活動に専念できるようになると思っています。

コンピュータ通信の最大手のNIFTYには「野鳥フォーラム」があります。数年前の登録者数が6000人と聞いていますので、現在では1万人を越えているかもしれません。実際の活動メンバーは数百人程度という説もありますが、書かれているコメントを見る限りリアルタイムで情報が伝わっていきまじし、話題は全国規模です。そして、オフと称しての探鳥会が月1回程度、各地で開催されています。さらに、バードソンでは100万円単位の募金を集めてくれました。首都圏の日本野鳥の会の支部の規模と活動をしのぐ全国規模の組織がコンピュータのネット上に存在するのです。

インターネットで検索すれば、それぞれの専門分野の研究や保護を行っているサイトをいくつも見つけることができます。個人のサイトは、さらにたくさん見つけることができます。このように、情報化社会の中で新しい活動形態のグループが出現し、さらなる活動を展開することがこれから次から次に起こるかも知れません。インターネットがスモールビジネスにとってたいへん有利であるという評論をよく聞きますが、まさに小さな組織にとっては救いの神となります。

また、国際的な活動の分野では、1960年代までは、バンディングという国際協力が必要な活動を行っていた山階鳥類研究所が独占していました。というか他の団体はそこまで関わる力がありませんでした。その後、世界野生生物基金日本委員会(WWFJ、現在の世界自然保護基金日本委員会)ができ、さらに日本野鳥の会が窓口的な役割を果たしました。1980年代からは、国際水禽調査局(IWRB)日本支部などのように、それぞれの団体の日本支部が担うというパターンが現れました。これまでは、それぞれの団体が海外の活動家や研究者と連絡をとっており、それ以外のサークルが海外の団体や研究者と情報交換をすることは多くありませんでし

た。

しかし、各種の問題に取り組むボランティア・サークルであっても、今ではホームページやEメールのやりとりを通して、直接、相手と簡単に情報交換ができるようになり、国際的に情報を得ることができ、活動に参画することができるようになりました。このように、専門的な、あるいはごく一部の分野に限った問題を取り扱っているサークルでも、活動の場と内容をより広くより深くすることができますのです。

もっとも、コンピュータの活用ということでの問題がないわけではありません。まず、現状では全員がコンピュータを持っているわけではありませんので、情報の貧富の差をどう是正するか、この移行期間をどう乗り越えるかが問題です。とくにバードウォッチングのファンは中高年が多いので、このギャップには大きなものがあり、コンピュータのない方は取り残されてしまった感じがすることでしょう。その間、大きな組織がお金のかかる紙媒体による機関誌を発行することでその穴埋めをするという役割は、当然重要であると思います。

さらに、コンピュータ化できない事柄があります。たとえば、探鳥会はいくらバーチャルに音と映像で表現できても、コンピュータが代わりを務めることはできません。逆にインターネットやSOHOが活発になり、人と人が直接、触れあう機会が無くなればなるほど、探鳥会のように人と自然に触れ合うことのできるイベントへの参加者が増えることが予想されます。この探鳥会は、全国規模ではなくローカルであればあるほどやりやすい行事ですので、小さなサークルや地方の組織の活動はより活発になっていくことでしょう。

ここで、成功しているグループについて多少の分析をしてみましょう。

まず、はっきりとした目的を持った組織であることでしょう。これは、特定の種類、問題、地域と活動の対象とする事柄が明確であるということです。いわば専門店のコンセプトがはっきりしていればいるほど、小さな組織にとっては活動しやすいということ。次から次に手を広げ、多角経営で失敗ということにはならないわけです。けっきょくのところボランティアの限られた時間と労力の中で活動していく限り、目的を絞っておかないとやっていけないということあります。また、会名をはじめ目的がはっきりしていれば、同好の士も集まりやすく、さ

らに活動が活発になるというパターンにもなります。

次に、中心になる人物、リーダーの人格、やる気などが大きく作用しています。とくに、やる気、熱意が重要だと思います。そして、前述のように心で動く、心で動かすわけですから、人柄も大きく作用しています。民主的な組織が理想的なのですが、いちいち皆が集まって決を採るということできないことが多いので、リーダーの一存で物事を決めていかななくてはなりません。それでも許される人柄の持ち主であることが理想的です。従って、自己顕示欲の発露として活動している人、いわゆるお山の大将になりたい人がリーダーになっている組織は必ずから限界が見えてきます。

また代表、あるいはリーダーたちの時間、資金の調達のうまさでしょう。仕事をしている限り、時間がとれるのは週末と休暇。家庭を持っていれば、もっと時間はありません。活動に専念できる環境を作り上げることができる職場と家庭での心配りが重要であり、それが自然にできる人柄が必要なんでしょう。さらに、補助金やTVの企画などに参画し、活動と平行して資金を集めるなど、アイデアとセンス、実行力が備わっていることが必要です。

また、自分たちの活動を客観的に見られるかどうか。たとえば、保護の対象にしている地域、鳥が日本でどれだけの価値のあるものか、世界的にはどうなのかなど、冷静に判断できる見識、知識、そしてネットワークが必要です。以前、アメリカ人の活動家に「日本で価値があるのは、石垣島と小笠原諸島くらいだ」と言われたことがあります。この時、正直言ってむかつきましたが、確かに世界の自然の重要度から言ったらそんなものでしょう。その時から、私は、こことここ、これとこれは、日本人にとって必要だから保護をするというように考えるようになり、保護の必要性の理論武装をより強化しなくてはならないと思うようになりました。

小さな組織で地域限定で成功していないのは、この自分たちが対象としているところが、どれだけの価値があるものかの判断をしておらず、熱意があるだけというパターンです。たとえば、県内有数とか唯一と言われても、日本レベルで見て大したところでなければ、ちょっと知識のある人には「なーんだ」と思われてしまいます。マスコミだってしっかりと勉強していますから、組織としての信用を失いますし、理論そのものを疑われてしまいます。狭

い業界のさらに狭い組織だけでの価値観で盛り上がって活動しても、限られた賛同しか得られないと思います。

ここで誤解なきように言っておきますが、そのような場所でも保護は必要なのです。身近な場所、狭い場所でも一つ一つこまめに保護していくことこそ、今の日本の自然保護活動に必要なことであるし、しなくてはならないことなのです。ですから、リーダーは、対象となる地域や問題が客観的に見てどういった価値があるのか見極めて、言葉を選び、理論を展開しなくてはなりません。それを判断できる知識と情報収集ができるネットワーク、日々の学習能力を持っていなければならないわけです。

鳥業界の未来と展望

今後は、マイナーな組織にとって有利な状況になる可能性があります。そして、専門的な組織の活動が活発になることが予想されます。そういった中で、日本野鳥の会や日本鳥類保護連盟のような比較的メジャーな全国組織の役割と活動形態がどうなるのが、大きな課題となります。また、これら全国組織の活動いかんによって、この業界の発展そのものにも大きな影響が及ぶことですので重要なことです。

今まで、全国組織には、国際的な窓口、あるいは環境庁などの行政への窓口としての役割がありました。国際的な窓口については、前述のように情報化社会が変えるでしょう。また、環境庁が省になり、対応も変わってくれば、あるいはマイナーな組織がそれなりの力をつけてくれば、さらにNPO法により法人格として認められれば直接の対話の機会も多くなることでしょう。そうなると全国組織の存在理由も変わってくると思います。もうしばらくすると連絡組織としての役割、中央組織としての意味がなくなるかも知れません。その辺の危機感をまず認識すべきでしょう。

そういった中で、私なりに思いつく今必要なことは、人材の育成と資金の調達でしょう。この二つは、資金が集まらなければ人は集まらない、人が集まらなければ資金を集めることができないというように、連動しています。いずれにしても、プロフェッショナルの活動家をかかえ、プロとしての実質的な活動を展開する組織が必要だと思えます。プロ意識を持ち、長年組織が蓄積させてきた知識と技術を修得した人間の集団がこの業界の中心にあつて

こそ、業界の活性化が計られるものと思います。

資金調達については、低金利時代の中で基金をつくりその果実で運用資金をまかなうということではできなくなりました。また、不景気の中でどのような方法があるのかは、不透明な時代です。しかし、寄付と会費、あるいは委託事業に頼るだけの事業では、拡大していくことが厳しいのは確かです。不景気とはいえ収益を上げている会社はあるのですから、営業的な収益のアップを考慮すべきでしょう。財団法人は、収益事業に関しては制約があります。しかし、収益を上げるためには世間一般のルールとトレンドを把握しなくては無理です。収益を上げるために、世間に開けた部門が組織にあり、その情報が組織全体に行き渡るシステムがあれば、会員の増加や寄付集めに至るまで相乗効果をもたらすものと思います。

また、それぞれの位置でそれぞれの立場の責任を感じて欲しいと思います。小さなサークルであっても、そのエリアの野鳥についての責任を持つこととなります。また、特定の種類を対象にしているのなら、その種類についての責務が生じているという自覚が欲しいのです。ボランティアの無責任さで、いつの間にか運動が立ち消えたり、報告のないままに自分たちが情報を独占し自己満足に浸っていて欲しいはないのです。

日本野鳥の会や日本鳥類保護連盟などの大きな組織は、なんといってもこの業界をリードしているのですから、その責任を感じて活動をして欲しいと思います。といっても、私が日本野鳥の会や連盟の職員の時には、日々の仕事に追われ、業界の一員であり業界について責任を持って働くという意識を持つ間もありませんでした。しかし、これからは私のような見方をする者がいることを知っていただき、日々の仕事に生かしていただければと思います。

最後に、いずれにしても時代はどんどん変わっていきます。これまで書いたことも、1999年11月現在の話で、1年先のことは正直言ってわかりません。そのため、たえず現状を認識しトレンドを把握しつつ、状況に応じた活動を模索していかなければならないでしょう。時代は次々と変化しています。鳥業界の実状の変化と社会の変化をとらえて、活動の方針や具体的は施策を講じなくては、生きた活動はできないと思います。

(1999年11月12日 記)

もりまき通信(9)

水鳥たちの2000年問題

自然観察指導員 森 真希

●まさか野鳥に「Y2K」！？

1999年から2000年を迎えるにあたって、昨年末いわゆる「2000年問題」が大きく取り上げられた。あらゆる機関にコンピュータが導入されている現代、ソフトの西暦の読み違いで生じるライフラインの混乱や情報通信のトラブルなどが危惧されていたが、結局は大騒ぎするほどでもなかったことは周知の通りである。しかし、コンピューターからはかけ離れた分野で「2000年問題」が起きてしまい、この辰年の幕開けはその関係者にとって非常に慌ただしいものになった。今回は野鳥にふりかかったこの問題を簡単に報告させていただこうと思う。

●コハクチョウ集団越冬地南限の地

鳥取県と島根県の県境に位置する「米子水鳥公園」(以下「水鳥公園」)は、中海の干拓地につくられた野鳥たちのサンクチュアリである。毎年、1000羽前後のコハクチョウをはじめ、総数10000羽近くのガンカモ類が冬越しをする場所で、珍鳥迷鳥の記録も多い。

コハクチョウは10月中旬から3月中旬の約5ヶ月間、水鳥公園をねぐらとして利用し、日中は中海の対岸にある安来平野の水田地帯で採餌している。したがって、彼らの生活リズムは、早朝水鳥公園を飛び立ち餌場へ向かい、夕方ねぐらである水鳥公園に戻ってくることを繰り返している。昨年12月末には850羽ほどのコハクチョウたちが、いつも通りに公園で過ごしていた。

●水鳥公園の異変

元日の朝、私は公園のレンジャーとして勤務している主人と一緒に水鳥公園へ到着した。いつもなら数百羽のコハクチョウたちがネイチャーセンターの正面でおでかけ前の時間を過ごしているが、この時、池の様子に異変があった。カウントできたコハクチョウは540羽と少なく、普段はあまり集まることのない池の東側に片寄っていたのだ。みな首を伸ばし落ち着かない様子であたりを警戒しているかのようだ。この日、水鳥公園には電話での問い合わせ

が何件もあり、公園の近所の方からも「夜中にコハクチョウがえらく騒いで飛んでいたが大丈夫か？」とのこと。

翌2日の早朝、事態はさらに悪化。なんと7羽のコハクチョウしか池にいなかった。公園オープン以来初めてのことであった。

●ミレニアムイベント花火

コハクチョウたちの挙動がおかしくなった原因は、水鳥公園の近隣で2000年に年が変わる大晦日の夜と元日の夜、2度に渡って盛大な花火が打ち上げられたことによることが分かった。

花火といえば、日本の夏の風物詩として文化としても長い歴史をもっている。ところが、冬に花火が打ち上げられるというのは、米子市内でも過去殆どなかったらしい。花火が普通に打ち上げられる夏、コハクチョウたちはシベリアで子育ての真っ最中。そこは花火を体験できるような場所ではないであろう。そして越冬地では、コハクチョウの滞在期間中、花火が上がることはごく稀であった。つまり、水鳥公園をねぐらとして利用しているコハクチョウやカモにとっては、まさに「初体験」のお祭り騒ぎだった訳である。

●生活リズムの激変

水鳥公園では、コハクチョウたちが食べる池の水草が減ってきた頃、農家の方から頂いた古米を早朝給餌している。与える量はそう多くないが、一部のコハクチョウやカモたちがその朝ご飯を食べ、その後安来平野に出勤する。しかし2000年になってからは、夕方暗くなってもコハクチョウたちは公園で落ち着くことなく飛び去ってしまい、早朝の給餌のお米を目当てに朝帰り組みが池にやってくるという、今までの公園の時間の過ごし方とは全く逆の現象が起きてしまった。

また、中海を通るヨットや害獣防除用に畑に設置された空砲、池のそばを通る車のライト、さらには公園内の浄水ポンプの音にまで過敏に反応するようになり、天然記念物のマガン300羽も姿を見せなく

なった。

この状態は約2週間以上も続き、北帰行までに通常通りの生態に戻るか、来シーズンも飛来するかどうか、色々な心配が公園関係者や市民の間を駆け巡った。

●シベリアへの北帰行

1月下旬、ようやく多くのコハクチョウたちがねぐらとしての水鳥公園に戻ってくるようになった。マガンも2月中旬頃から毎日公園で見られるようになり、いつも通りの様子になるまで1ヶ月以上かかったことになった。

例年と同様に、コハクチョウたちは3月になると次々と北に向かって飛び立ち、3月20日、最後のグループが公園を去って今期の水鳥公園の北帰行は終了した。

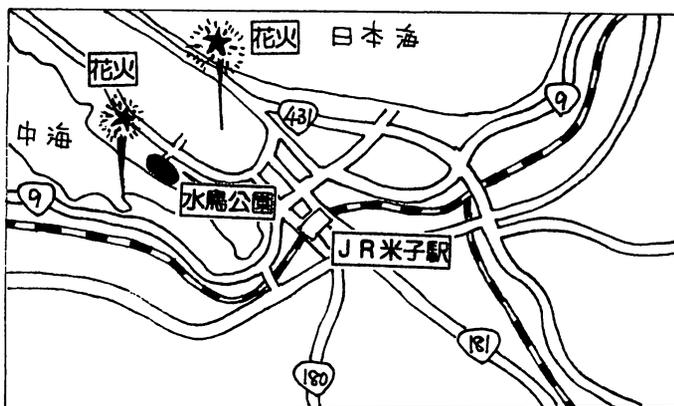
●生き物たちとどうつきあっていくか

中海周辺に飛来するコハクチョウは、地元のシンボルとして大切にされている。出雲風土記が書かれた時代から、この白い鳥の飛来が記録されており、地元の人間とおつきあいも数百年あるいは数千年単位であろう。はるばる5000kmも離れたところから、安心して冬を過ごせる土地に渡ってくる。そこにはハクチョウが安全だと認識する餌場とねぐらが両方あることを意味している。

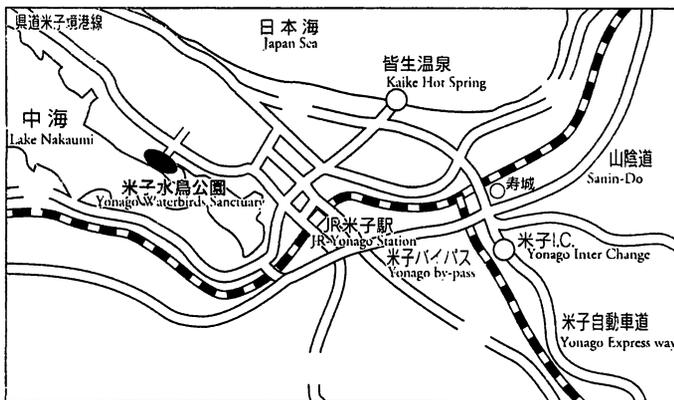
今回の騒動は、一時的とはいえ、水鳥たちから安全な場所を奪い取った形となった。類似の事例が他県にもいくつかあるらしいが、人の生活圏と密接している野生生物の生息地には、程度の差はあれ少なからず潜在している問題なのかもしれない。

生き物たちとどうつきあっていくか、色々な課題を投げかけたこの「2000年問題」、同じようなことが繰り返されぬようお願いしたいものである。

周辺位置関係



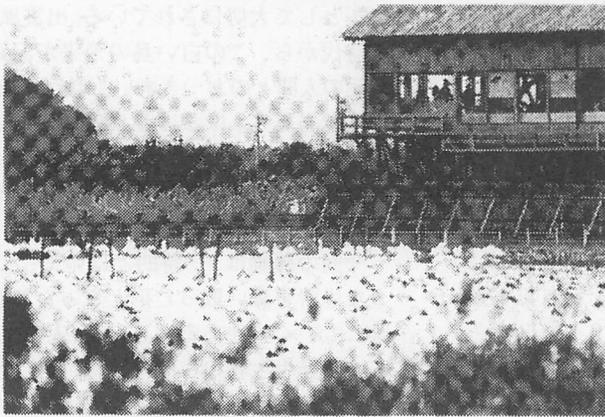
交通アクセス



花火にピツクリ!!

鳥取県米子市の米子水鳥公園で四日、越冬していたコハクチヨウ約八百羽すべてが姿を消した。

対岸の鳥根県安来市の西暦二〇〇〇年記念イベントで打ち上げられた大量の花火が、コハクチヨウを驚かせたらしい。



コハクチヨウやカモ類の楽園だった「米子水鳥公園」 昨年12月4日、鳥取県米子市

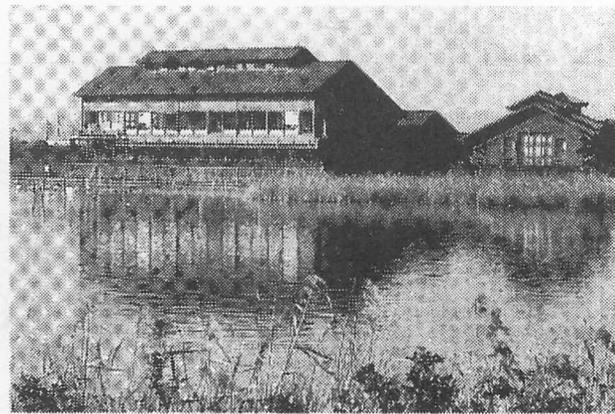
鳥取・米子 水鳥公園 記念イベントで

カモ類も大半が姿を消しており、日本野鳥の会鳥取県支部は「来シーズンへの影響も考えられる」と主催者に嚴重に抗議した。

花火を企画したのは、安来商工会議所青年部。一日午前零時、「ファイナルカウント'99」と題したイベントで一度に二百発を打ち上げた。打ち上げ場所は同公園の南西約三キ。花火は夜空を明るくし、ごう音が水面に反響したため、コハクチヨウはパニック状態となり、一斉に同公園から飛び立ち、上空を逃げ惑ったという。

その結果、翌日から同公園に寄り付かず、二・四日の早朝に確認したのは七羽だけ。日本野鳥の会県支部の調査によると、中海の鳥根県側の飯梨川河口でコハクチヨウが急増し、通常二百羽が三倍以上の七百羽になった。夜間は同公園を避け、ねぐらを分散しているらしい。また、国の天然記念物のマガン約二百五十羽のほかカモ類約八千羽も大半が姿を消している。

コハクチヨウ消ゆ



カウントダウンの花火でコハクチヨウは姿を消した 4日午前10時

を消し、同支部の土居克夫事務局長は「水鳥への配慮が足りない」とイベント主催者に嚴重に抗議。

同公園の小関利孝館長も「花火は控えてほしかった。影響の長期化と来シーズンの飛来数の減少が心配」と頭を痛めている。

日本海新聞 平成12(2000)年1月9日

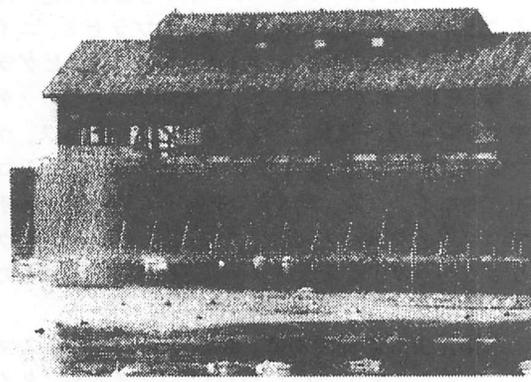
「自然との共生」の在り方は…

水鳥のY2K



米子水鳥公園(米子市彦名新田)のコハクチョウの多くがミレニアムイベントの花火に驚いて姿を消している問題は、全国で関心を集めている。人間社会に課せられた「自然との共生」の在り方を、次代への継承とともに世に語る「水鳥のY2K」。他県での類似例や専門家の見解を交えて検証した。

(西部本社・沢田圭太郎)



安来市上倉庫所が安来港から約二百里の花火を打ったのは昨明け早々の元日午前零時ごろ。安来市の成人式とタイアップした初めての祝賀行事だったが、約二、三時間後、職員が異常な行動に異変

「行動に異変」 警報は夜明けを告げるコハクチョウが、いつとも飛び立てるまじうに浮いたま体たえいる様子を見て、職員が異常な行動に異変

とされた。その夜、コハクチョウは、七時までに、早朝時迄の騒音に慣れたコハクチョウに慣れぬ影響を与えた。花火が上がっていた約十分の間、公園周辺での複数の保護者が、大声で鳴きながら夜空を渡るコハクチョウの群れを監視。同日早朝、公園職員が出勤すると、早朝は七、八百羽いるはずのコハクチョウが五百羽に減っており、いずれも花火の方向から最も近い池の岸辺に海を寄せ合っていた。

花火、狩猟の銃、ヘリ爆音…

他県で前例、対応協議へ

コハクチョウが激減した米子水鳥公園。「水鳥のY2K」は救済と

「抗議の電話が殺到した。強行すれば町の姿が…」

「抗議の電話が殺到した。強行すれば町の姿が…」

宮城でも水鳥受難 ミレニアムイベントに思わぬ落とし穴があった。保護の教訓にした事例が宮城県にある。

「保護の教訓にした事例が宮城県にある。」

「保護の教訓にした事例が宮城県にある。」

と集まり、翌三日から七日まで、早朝時迄の騒音に慣れたコハクチョウに慣れぬ影響を与えた。花火が上がっていた約十分の間、公園周辺での複数の保護者が、大声で鳴きながら夜空を渡るコハクチョウの群れを監視。同日早朝、公園職員が出勤すると、早朝は七、八百羽いるはずのコハクチョウが五百羽に減っており、いずれも花火の方向から最も近い池の岸辺に海を寄せ合っていた。

「保護の教訓にした事例が宮城県にある。」

昆虫図鑑に想う

事務局 箕輪 多津男

先頃ふとしたことで、かつて少年期に使い古したハンディタイプの昆虫図鑑を、久方ぶりに繙いてみた。するとどうだろう。四半世紀前には、郊外の雑木林や野原、あるいは周辺の田畑等で、それぞれの季節ごとにあたり前のように見ることできた昆虫たちが、ものの見事に並んでいるのではないか。そう、当時は昆虫図鑑と言え、そこここで難なく見つけることのできる虫たちを、確認するための必需品であった。逆に言えば、たとえ相当の種類が掲載されている場合であっても、図鑑に出ているほとんどの昆虫は、私たちにとって何ら珍しいものではない、言わば普通種だった訳である。

それが今はどうであろう。そこに出ているものの大半が、希少種となってしまっているのではないか。いや希少種どころではない。身近なところでは全く見られなくなってしまった種も、数えてみるときりがない。愕然とすると同時に、思わず冷たいものが背中を走るような感覚に襲われた次第である。

少年期における昆虫に纏わる思い出が鮮明であればあるほど、そうした現状からくる淋しきや哀しきは禁じ得ない。

クヌギやコナラを中心とする雑木林で捕まえたカブトムシ、コクワガタ、ノコギリクワガタ等をはじめとするたくさんの甲虫類。カナブン、アオカナブン、クロカナブン、シロテンハナムグリ等は、その色を比べるために目の前に並べることができた。ノコギリカミキリの忙しない動きも忘れられない。

蝶や蛾の仲間も数限りなくいた。夏の朝、建物の白い壁を、クスサン、ヤマユガ、ウスタビガ等、大型の蛾がびっしりと埋め尽くしていた光景も頭から離れない。その中にオオミズアオの鮮やかな水色が一際映えていた。オオスカシバやヒトリガ、シャチホコガ等は独特な姿を、また蝶では、アオスジアゲハやカラスアゲハ、キタテハ、ルリタテハ、ベニシジミ、アオバセセリ等、鮮やかな色の共演を見せてくれた。

トンボもシオカラトンボを代表とするトンボ科のものは種類も多くごくあたり前で、ヤンマやカワトンボの仲間も珍しいものではなく、またいわゆるア

カトンボ(アカネ)の仲間は毎年、季節を迎えると大群をなし、イトトンボやアオイトトンボの仲間も10種程度は身近に見ることができた。

カマキリの仲間も、オオカマキリ、カマキリ、チョウセンカマキリ、コカマキリ、ヒメカマキリ等はごく普通種で、ハラビロカマキリもまれに見つけることができた。セミの仲間も、アブラゼミ、ニイニイゼミ、ミンミンゼミ、ツクツクホウシ、ヒグラシ等、それぞれがすだくように鳴いていた。バッタやコオロギの仲間も、クツワムシ、キリギリス、ウマオイ、スズムシ、カネタタキ、ツツレサセコオロギ、ナキイナゴ等、声(音)を競うものや、トノサマバッタ、クルマバッタ、コバネイナゴ、ショウリヨウバッタ、オンブバッタ等、その姿を競うもの等、挙げればきりが無い程生息していた。

水棲昆虫も同様である。マツモムシ、ミズスマシ、ミズカマキリ、ゲンゴロウ、コオイムシ、タイコウチ、ガムシ等、決して少なくなかったし、タガメを見つけることさえできた。もちろん、水のきれいななどころでは、その周辺にゲンジボタルやヘイケボタルも見ることができた。

くどくなってきたので、この辺にしておきたいが、今挙げたような種は当時見たものでも、ほんの一部に過ぎない。しかしながら、すべてが遠い夢のようになってしまった。これが現実である。

今少年期を過ごしている子供たちにとっては、多くの昆虫が、最初から珍しいもの、あるいは見るることができない存在となっている。またそれが普通のことであると信じているかもしれない。そうしたことが、私にとっては、また新たな心の痛みを呼び起こすのである。

時計の針を戻すことはできない。そして今日も、開発の名のもとに郊外の自然環境は変貌を遂げていく。その度に、多くの昆虫たちがすみかを追われて滅んでいく。どう考えても、このままではいい訳はない。理屈よりも、生物の一員である人間としてごくあたり前にそう感じる。

ならば、人間のすべての営みにおける大きな流れを変えなければならない。その為に、何かをしなけ

ればならない。漠とした、しかも抜け道のないような不安に駆られつつ、実現可能なこれと言った具体的な方法も想い浮かばないまま、しかしそう考えずにはられないのである。

古びた昆虫図鑑は、多くの警鐘を今も鳴らし続けている。そのことに、私は改めて気付いたのであった。

編集後記

遅くなりましたが、59号をお届けします。

本会会長の江袋島吉先生がお亡くなりになりました。先生は、今から20年前、本会が発会することになった当時の発起人のお一人に名前を連ねられ、以来、本会の発展のために御尽力下さいました。

先生は、御専門は社会科でしたが、深く自然を愛された方でした。

本会会長に就任すると同時に(財)日本鳥類保護連盟理事となられ、以来、本会の常務理事会・行事はもとより、連盟関係の諸行事のほとんどに御出席され、その任務を遂行する模範を示されました。

また、私たちの力量が足らず、思うような事業の伸展が見られないときも、

「無理の無いようにやってくださいよ。」

と、温かく励まして下さいました。会長としては苦しいお立場にあられたことを思うとき、改めて努力しなければと思った次第です。じっくりと事業に取り組まれ、役員や会員一人一人の力量に期待し、それを伸長なさろうとするその姿勢は、正に教育者のそれであったと思います。

長らく巻頭言を御執筆いただきましたが、単なる愛鳥教育の興隆をというのではなく、自然を見る目や体験が大切であることをその根本に置いていらっしゃると思います。

また、(財)日本鳥類保護連盟発足当時の歴史を振り返り、愛鳥教育の必要性とその在り方について改めて言及されたことが、強く印象に残っております。

編集者として、当然、字句の修正を試みるのですが、先生の原稿はほとんど直すところがありませんでした。字体や割付についても事細かに、しかも適切な指示がついていて、毎回、手書きのしかも何

回も校正を重ねられたであろうと思われる原稿を前にして、その御努力に頭が下がる思いでした。

先生の思い出は尽きませんが、御遺徳を偲びつつ、微力ながらも努力を重ねていこうと思えました。心より御冥福をお祈り申し上げます。

水元公園での親子探鳥会は、参加者は少数でしたが、会の持ち方としては好評を得ました。今後、全国各地でこのような催し物を開催できないものかと考えております。

本会顧問である松田道生氏の第2回目の講演会を開催しましたが、その内容を松田氏に改めて原稿にしていただきました。

本会も「鳥業界」の一員として、今後どのような方針で活動していったらよいか、いろいろと考えさせられる内容でした。

なお、第1回の講演「主観と客観のバードウォッチング」が(財)日本野鳥の会東京支部の支部報「ユリカモメ」の6月号から連載され始めています。

(染谷)

愛鳥教育 No.59

平成12(2000)年6月30日

発行人	杉浦嘉雄
発行所	全国愛鳥教育研究会
住所	〒166-0012 東京都杉並区和田3-54-5 第10田中ビル3F (財)日本鳥類保護連盟内
電話	03-5378-5691
FAX	03-5378-5693
会費	3,000円
郵便振替	00180-7-12442
印刷所	祐文社